

# アツツとキスカ

高田 友

昭和十七年六月、ミッドウェー作戦と並行して、日本軍は「アツツ島攻略作戦」を敢行せり。アツツ島（熱田島）には陸軍一〇〇〇人（米軍來襲時には二六五〇人、玉砕突撃せるは三〇〇人、生存兵は二九名「俘虜となる」）、キスカ島（鳴神島なるかみたち）には陸海軍六〇〇〇人（最初は海軍のみ／救出時には五二〇〇人）駐屯せしめられたり。

アツツ島もキスカ島も、アリューシャン列島に屬すれど、現今なほ米領なり。

昭和十八年五月五日、米軍、戦艦三隻を含む十九隻を以て、アツツ島に襲來す。五月十日上陸開始。たちまちにして海岸に橋頭堡を築く。

五月三十日、生き残りたる三〇〇人、突撃して玉碎す。突撃とは言ひ條、力盡きたる將兵走るを得ず、海行かばを歌ひつつ徒歩にて敵陣に向ひ、米軍の銃弾を浴びて一人また一人と斃れ行く。鬼氣迫る凄慘なる姿に、米兵は銃撃しつつ恐怖の餘りに絶叫せりとぞ傳へらるる。

これより前、大本營は、五月に入りてより、アリューシャン列島の放棄を決定し、撤退作戦を検討するに、兩島殘存兵をいづれも救出するは難ければ、アツツ島守備隊は見殺しにするの外なしと斷を下せり。

守備隊長の大本營に送りたる訣別の電報、豈涙を誘はであるべけん。

曰く、他に策なきにあらざるも武人の最期を汚さんことを恐る、と。

降伏したらんには、命全うするを得べけれど、死を以て名譽を守るにいづれぞやとの謂ひなり。ああ、日本男兒の氣概、長く青史に留めらるべし。

さはさりながら、將校こそさもあれ、徵用せられたる下士官兵に名譽の死を強要するの無殘。むしろ、上官の「おまへたちは俘虜になれ」との慈悲の言葉一つだに記録に残るなしやと、やはか恨みを吞まであるべしや。

翌朝、參謀總長、參内して此の旨を上奏するに、聖上の仰せらるるは、「武人の譽ほまれ、此れに過ぐるなし。朕深く感ずる所ありと打電すべし」

參謀總長の敕答あり。「恐れながら、現地にては既に無線機を破壊して候ひしかば、打電せんとも受信するは叶ふまじく候」と。

一天萬乗の君は、暫し沈痛なる御面持にて渡らせたまひけるが、やがて綸言あり。「それでもいいから打つてやれ」と。

ああ、忝きかな。かくて優渥なる御誼は電波となつて北海の空に鎮魂の樂の音を響かせたり。

キスカ島はアツツ島よりも米本土に近ければ、先に來襲あるべしと思はれしにさにはあらざりけり。いづれの島も樺太北端の眞東にて、面積はキスカ二七七七平方米、アツツ八九二平方米。因みに佐渡島は八五四平方米。

六月上旬には米軍はすでに嚴重なる哨戒網を敷くに至る。日本側は、これを搔ひ潜りて、全將兵を救出せんと企畫す。當初は潜水艦を用ゐて實行に着手したれども、米軍に發見せられて多大の損害を被りけり。しからばすなはちとて、水上艦艇（水雷戰隊）による撤退作戰に切り替ふ。救出部隊は千島（カムチャトカ南端の對岸）の占守島（隣の幌延島から出港）よりアリユーションへ向ふ。

試行錯誤を繰り返したる後、七月二十九日に突入。前日二十八日に米軍はレーダーの誤認によりて、甲斐なく砲彈を發射し、これによりて、救出部隊を潰滅せしめたりと確信してありき。キスカ近邊に停泊せる米艦隊は撤退し、救出成功の契機とこそはなりたりけれ。恩賜の武器をことごとく投棄せしめしかば、行軍極めて迅速なり。大發動艇によりてピストン輸送を行ひ、五二〇〇人を五十五分にて收容するを得たり。三日後の八月一日には全艦艇幌延島に歸投するの快擧を成し遂げたり。

米軍は皇軍の撤退を知らずして、艦砲射撃を續け、二週間後の八月十五日、三萬四千人を以て上陸作戰を行ふ。濃霧と混亂の爲に同士討ち頻りにして、死者百人を出したり。上陸して探索するに、日本兵は一人なりと殘存せず、犬數正を見るのみ。

撤退に際して、皇軍軍醫、「ペスト患者收容所」といふ虚言を書きたる看板を遺す。これを翻譯したるが、當時二十一歳なりしドナルド・キーン。これによりて、上陸米軍は大混亂に陥り、キーンもペスト感染の疑ひ生じて、後方へ送らる。ペストの段、偽りなりと判明するは終戦後の儀なりきとの由。

（令和元年五月三十一日受附）